



地域人材育成研究 2

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立今治北高等学校大三島分校 生徒インタビュー（樋田有一郎）

地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化（樋田大二郎）

愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組

——地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して——（吉住牧人）

編集・発行：地域人材育成研究会

2020年4月



愛媛県立今治北高等学校
大三島分校



大三島分校は日本総鎮守と称される大山祇神社を擁し、神々が宿る島とされる大三島にある。愛媛と広島をつなぐしまなみ海道のほぼ中央にあり、県庁所在地の松山市からはクルマで1時間半ほどの距離である。

大三島は他の地方郡部の高校と同様に自然が豊かである。大三島分校の場合は海が近く、体育の授業や学校行事にマリンスポーツが取り入れられている。

地域住民が分校を積極的に支えている。近年はU & I ターン者が多く定住し、彼らの支援は大きな力となっている。生徒インタビューでは「大三島分校生が何かをするとすると、“私たちにも何かできることはないですか”と地域の人が声をあげて協力してくれます」と語られていた。

分校の前身である大三島高校は1948年に設立が認可され、第1次ベビーブーマーたちが入学した1963年には募集定員が220名であった。しかし、その後徐々に募集定員、入学者数ともに減少し、2005年には愛媛県立今治北高等学校の分校となり、募集定員は40名となった。現在は、全校生徒が76人という小さな分校である。

愛媛県の県立学校再編整備計画では、分校は「1学年の入学者が30人以下の状況が2年続き、その後も増える見込みがない場合は募集停止を行う」としており、平成31年度は入学者が30名以下だと廃校になることが決まっていた。しかし、平成31年度の大三島分校の1年生は、募集定員いっぱいの40名であり、入試倍率に至っては1.05倍であった。愛媛県の高校の多くが1倍を切っているのとは対照的である。

受験者の多さの背景には、町、住民、高校が一体となって、分校存続のために智恵と資源を出し合っていることがある。全国募集、バス通学費の補助、給食の実施、そしてなにより、地域の特色を生かした教育の取り組みがある。

町や住民だけでなく、分校生も中学生対象の1日体験入学の運営や地域みらい留学フェスタ（県外生募集イベント）への参加、地域のイベントを通しての様々な働きかけなど、廃校危機を回避するための生徒募集対策に積極的に参加する。生徒たちは大三島魅力化プロジェクトと称する地域活性化の活動を行っている。大三島分校の教諭によると、生徒が写真甲子園の全国大会に出場して、高校存続の想いを語ったことも受験生増加に好影響があったという。





特色ある教育

大三島分校で特筆すべきは、廃校の危機を回避するために、生徒が地域の特色を生かした教育やボランティア活動の中で、自分たちが出来ることを「主体的・協働的で深く」かかわっていることである。

他の人口減少地域の学校と同じく、「少人数だからこそみんなが一生懸命で、一人ひとりに居場所があり、笑顔があふれる学校です」と称している。

「一生懸命、居場所、笑顔」の具体的なところを見ると、大三島分校で特徴的な教育は、体育の授業では海という地元資源を活用してマリンスポーツ（カヌー・ボート競技、水上バイク、トーイングチューブなど）を行っている。さらに、調理講習会を開催して、これも地元資源である地元食材を使い、地元の料理人の指導で魚を捌くところから調理を学んでいる。

また、パンフレット「大三島お仕事図鑑」を作成している。このパンフレットは、大崎海星高校の仕事図鑑と同様のコンセプトで作られたものであり、約10ヶ月間にわたって分校生が地元で働く人の取材（インタビューや写真撮影）・編集・校正を行い出来上がったものである。これは愛媛県の「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」の一環として行われる。2年生が行う福祉教育も充実している。これは地域の実態を把握し、地域と支え合い、思い合う心を養うことを目的として、福祉施設訪問ボランティアなど、全5回行われる。



参道ガイドボランティア

授業外では、大山祇神社の参道ガイドのボランティアを例年行っている。歴史の授業と関連づけられたボランティア活動であり、サービスラーニングとして位置づけることが出来る。地元の三島水軍鶴姫まつりにも分校生が積極的に参加している他、大三島認定こども園の園児との交流、高校周辺の除草の奉仕活動など、同校が行う教育活動には地元を資源としたり、地元と協働したりする多数のイベントが計画されている。

特筆すべきは、平成30年度から行われ令和元年が2回目となる「夕涼み会」である。若手のU & I ターン者や若手高校教員の会話の中から生まれたイベントであり、大三島が活気に溢れていた時代の夜市を復活させ、大山祇神社参道に賑わいを取り戻そうという目的、分校生に浴衣を着る機会をあげたいという思い、自分たちが楽しみたいという願いなど、さまざまな目的や思い、願いから生まれたイベントである。

分校の支援のもとで分校生にも企画運営担当として各自の思いを形にして貰った。

（文・樋田有一郎）



地域人材育成研究 第2号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立今治北高等学校大三島分校

生徒インタビュー

奈良教育大学 樋田有一郎

8 地域活性化の活動でうれしかったこと、大変だったこと、地域との交流

14 活動に参加して得られた積極性、話す力、プレゼン力、かわる力

20 分校と島、高校生にとつての地域、地域のためにしたいこと

28 将来の地域との関わり方は——外に出る、そして島に帰りたい

32 小さな学校の熱い教育

論考

34 地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化

青山学院大学 樋田大二郎

寄稿

38 愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組

——地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して——

愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課教職員係管理主事

(元愛媛県立今治北高等学校大三島分校教務主任／令和二年三月まで)

吉住 牧人



愛媛県立今治北高等学校大三島分校
〒794-1304
愛媛県今治市大三島町宮浦 5297-2

地域人材育成研究 第2号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立今治北高等学校 大三島分校
生徒インタビュー

奈良教育大学 樋田有一郎

インタビューは二〇一九年六月二七日、一三時から一五時まで、会場は大三島分校の校長室。インタビュー対象は、分校を選んだ分校生徒四名、および、活動の補足説明を行うために、二神弘明 大三島分校 分校長、吉住牧人教諭（教務主任・写真部顧問）が同席して行われた。インタビューは樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名である。

あらかじめ用意してあったインタビュー項目は、

- A. 活動のやりがい
 - B. 自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したと思うこと
 - C. 地域についての思い
 - D. 将来の地域との関わりかた
 - E. その他
- である。

大三島分校生徒 青山（二年生）、緑川（二年生）、
赤木（三年生）、柴田（三年生）

今号で扱った愛媛県立今治北高等学校大三島分校のインタビューデータは本誌第一号で扱った愛媛県立三崎高等学校のインタビューデータと併せて次で更に詳しく分析しているので参照されたい。

樋田有一郎二〇二〇「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える―学習目標と学習効果の整合性に着目して―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊二七号「早稲田大学大学院教育学研究科 五一―六三頁

調査概要

地域活性化の活動でうれしかったこと、大変だったこと、地域との交流



【うれしかったのは】

伝わった。来てくれた。褒めてもらえた。応援や励まし。おもしろかった。行動力が身に付いた。友だちの輪・人脈が広がった。

【大変なのは】

自ら進んで働きかけること。

【地域の人との交流は】

助けてくれた。温かかった。島のこと・人を知れた。島のイメージが変わった。

——大三島分校で行っている活動に関して、入学前にどのようなイメージを持っていた、実際にそれをやってみて、どのように感じたのか教えてください。いろいろな活動があると思いますが、自分が今、一番ハマっていることについて教えてもらえると嬉しいです。

青山 この学校が外部に対して、自分の学校や地域のことを発信していることを知って入学しました。実際に他の学校と協力して、地域を発信していく活動してみると、思っていたよりも大変でしたが、聞いてくれる人や見てくれる人の反応を見て、この学校や地域のおかげが伝わってよかったと思いました。また、観光を通してここに来てくれ

ることがとてもうれしかったです。

——実際に行ってみて、どのようなところが大変でしたか？

青山 自分から進んで話しかけなければ全く伝わらないことです。それが大変だと思いました。

——学校に来て、実際に何を行ってみましたか？

青山 去年の夏ぐらいに、島しょ部の学校の人たちと一緒に、島しょ部の学校のよさを観光客の人たちに伝えていくという活動がありました。

緑川 入学する前は私も、大三島分校がいろいろな地域活性化に取り組んでいることは知っていましたが、人数も少ないし、大規模校に比べてできないことがたくさんあるので、私は進路を迷いました。

大三島分校に来て、地域活性化に携わって、大三島分校に入学したい生徒や保護者の人たちと話をすると、小規模校だけど本当にいい学校だと褒めてくれることがとてもうれしかったです。

地域の方々も「大三島分校は頑張っていますね」というように、応援や励ましの言葉をくれることにとてもやりがいがあります。

——実際に入ってみて、一番印象に残っているのはどのような活動ですか？

緑川 私は地域の方々と協力をして、夏に夕涼み会というイベントを行い、屋台を出しました。それも地域の方々が協力してくださったからできたことです。私たち分校生だけでは絶対にできませんでした。そういう地域のひととのつながりがとても温かいと思いました。

——夕涼み会で助けられたのはどのようなときですか？ 夕涼み会の面白さは？

緑川 島内から思った以上にいろいろな人が来てくれて、すぐに完売や売り切れになりました。予想以上に人が来てくれたことがうれしかったです。

——赤木さんはどうでしたか？

赤木 私はずっと地元に住んでいました。高校の本当にすぐ近くに家があります。兄が大三島分校にいたので、少しは分校のことを知っていました。

中学校のときに進路のことを考え始めました。正直、私も進路について、今治北高校の分校か、伯方高校かと迷っていましたが、結局は大三島分校にしました。

正直に言えば、入学前は分校に対してあまり関心はありませんでした。廃校の危機にあることは聞いていました。小学校のときにも一回、廃校の話は出ていました。私は「また廃校になりそう」ぐらいの感覚で捉えていました。自分が入学するときに卒業はできるので大丈夫、という感覚でした。

私が一年生で入学したちょうどその年に、パンフレットを作る活動がありました。それが少し面白そうだと思って、パンフレット製作に携わりました。

それを通して、私は実際にイノシシ関係の革製品や猪骨ラーメンの人を取材しました。

取材をしていくうちに、ずっとこの町で暮らしていた自分の島なのに、本当に知らないことが多いと思いました。自分が知っていた世界はごく一部の本当に狭い視野しかないことに気づかされました。

革製品や猪骨ラーメンの方は「地域おこし協力隊」として大三島で活動し、任期終了後に定住した移住者の方でした。私もそのときの取材で初めて、地域おこし協力隊の存在を知りました。そうやって大三島を元気にしようという活動を頑張っている人が移住者だということに、とても驚きました。

もちろん島の人たちも大三島を元気にする気持ちはあると思います。が、島のためにこれだけ頑張ってくれている人がいることに気づいて、とてもうれしかったです。

——もともと地域に住んでいるけれど、地域のことを知らなかったのですか？

赤木 本当に全く知りませんでした。あまり島自体を回ることもありませんでした。この取材を通して、この島で様々な仕事をしている人がたくさんいることに気づきました。

——島に対するイメージは変わりましたか？

赤木 最初は何もないし、他の所と比べると、廃れている島で本当に田舎という感じでしたが、実際に外に出てみると、島にしかない良さがあると思いました。

私は二年生の冬に修学旅行で東京に行きました。東京はとても人が多かったです。あとはみんな速く歩くので、歩くだけで疲れました。家にいる普通のときと比べて、尋常ではないぐらいに疲れたので、修学旅行のときはすぐに寝付きました。時間の進み方が全く違う感覚に陥りました。

東京ではとにかく時間に追われる感じでした。次の電車はこの時間に乗らなければいけない、ここに行かなければいけないというように、時間内で行動しなければいけないので、仕方ない部分もあるかもしれません。

とにかく、時間の進み方が速い感覚がありました。

島に帰ってくると、島独特ののんびりとした時間を過ごすことができました。同じ日本なのに、時間の経過がこれだけ違うということを感じました。

私は星空を見ることが好きです。特に冬は空気が澄んでいて、とてもきれいに見ることができます。東京もちょうど冬でしたが、きれいでないわけはありませんが、空が見える範囲がとても狭いというか、こと比べて高い建物ばかりなので、見える範囲がとても小さいです。私の学校からの帰り道は電柱や高い建物が何もないので、とても広い空を見ることができます。

これも島にいるからこそ見える景色ということに気づかされました。



いのししバーガー用の解体作業（文化祭）

柴田 ここに入学する前は地域活性化のいろいろな活動をしていることは全く知りませんでした。進路はこの高校に決めていました。この高校にきた理由は将来のためにいろいろとここで勉強して次に生かしたいことがあったからです。

——柴田さんは大三島出身ですか？

柴田 はい。入学して先生から「活動をしてみませんか」という誘いが来るまでは、聞かされていたかもしれませんが、そのような活動については覚えていません。あまり関心はありませんでした。

参加をしていくうちに、楽しくて面白くなりました。普通の高校生活では味わえないような体験をさせてもらって、とてもいい経験になりました。

高校生の手による地域おこしイベントを開催し、そのクイズ大会で司会をさせてもらいました。そのときにいろいろな人と打ち合わせをしていくうちに、何でもできるような気がしてきました。失敗を恐れずにどんどんやっていく行動力が、そこで身に付いたと思います。

——最初は地域活性化のようなことは全く考えずに、進学のことだけを考えて来た。でも実際に取り組んでみてよかったと思いますか？
それとも、大変だと思えますか？

柴田 とてもよかったです。イベントに行って、そこで人と関わって、友達^{たち}の輪^が広がっていききました。人脈が広がって、とてもうれしいです。



——最初に自信がついたのは地域おこしイベントのときだそうですが、その後もイベントに出ましたか？

柴田 はい。いろいろなプレゼンテーションをさせてもらいました。

——柴田さんに友達ができたことやいろいろな広がり、学校の中だけではないということですか？

柴田 そうです。広島県や愛媛県にも友達が広がりました。イベントに来てくださったお客さんや地域の方にも広がりました。

——高校以外の友達についてはどうですか？

柴田 いろいろな社会人との出会いもあり、高校生活では体験できない話を聞かせてもらったことがうれしかったです。

二神分校長 「バリチャレンジユニバーシティ」でも人脈が広がったのではないですか。

——「バリチャレンジユニバーシティ」とは？

柴田 「バリチャレンジユニバーシティ」、略してBCUです。今治市が主催するイベントです。

大学生や社会人や高校生が今治市に集まってグループを作り、グループワークが行われます。年齢や立場は様々でしたが、グループのみん

なと仲良くなって、今もLINEで連絡は取り合っています。

—— 一番印象に残っている人とのつながりは何がありますか？

柴田 バリチャレンジュニバーシティでサイボウズ株式会社の青野社長が審査員で来られました。私たちがワークショップで考えたことを披露する発表会があつて、そのときに青野さんから「とても良い」と言ってもらえました。

副賞として、青野さんが取り組んでいるサイボウズのイベントに招待してもらうという、とても貴重な体験をさせていただきました。

吉住教諭 実は今、大三島分校の振興対策協議会のメンバーにヤノさんという方がいます。BCUに参加して柴田がヤノさんとながつたことがきっかけで、ヤノさんが大三島分校に興味を持ち始め、学校の運営に協力してくださることになったので、生徒の力は大きいと思います。

—— 間をつないだのですね？

柴田 そうです。知らず知らずのうちにです。

活動に参加して得られた積極性、話す力、プレゼン力、かかわる力



【積極性は】

自分を取り組まなければ駄目だという責任感が出てきた。中学校時代に比べて積極的になった。

【人と話すことは】

人前で話すことが多くなった。人と話すことがとても好きになった。

【プレゼンテーションは】

プレゼンテーションがうまくなっていることを感じる。自分が思っていた以上にアドリブでプレゼンテーションが出来た。本当に楽しいという気持ちが外部の人に伝わればいい。楽しそうと感じてもらえてうれしかった。

【かかわる力は】

コミュニケーション能力が上がった。自分のできることが広がった感じがする。人との交流が広がった。

——皆さんは二年生と三年生ですね。学年で違う感想もあると思いますが、自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したことについて教えてください。

青山 この学校に来る前は、自分から誰かに何かを伝えることがとても苦手で、本当に全く駄目でした。

いろいろな活動に参加してから、呼び込みなどの活動をして、自分が取り組まなければ駄目だという責任感が出てきました。それで取り組んでみると、意外と平気で、自分のできることが広がった感じです。

あとはいろいろな人との交流やインタビューをしたことです。この前も制服で歩いていたら、お仕事図鑑の作成でインタビューをした方が話しかけてくれました。

それ以外にもいろいろと一緒に活動してくれた人が、「この前はありがとう」という感じでどんどん話しかけてくれました。この学校に来てからは、前よりも人との交流が広がったと思います。

緑川 中学校のときは人前で話すことは苦手でした。話せと言われると話しますが、それほど好んではしないぐらいです。

大三島分校に来て、人前で話すことがどんどん多くなり、人と話すことも増えました。

中学校のときに比べて、人前で話すことは結構、できるようになりましたし、人と話すことがとても好きになりました。

一人一人が違う人で違う生き方をしているので、その人にしか聞けないことがたくさんあります。どんどん話を広げていくと、本当にキリがないぐらいにいろいろな話をしてくれます。こちらのためにもなるし、その人との人脈のようなものもできます。

人と関わることや話すことが、活動を通して得たことだと思います。

——高校に入ると、人間関係やコミュニケーションの仕方は変わるも

のですか？ 高校から他の学校の子が入ってきます。そうすると、高校デビューのようなことは起きますか？

緑川 友達が増えることですか？

——はい。

緑川 島外から来た人がいるので、人脈は少し増えました。

——それまでの自分のキャラクターが変わることもありますか？

緑川 いえ、ありません。そのままです。

——赤木さんはいかがですか？

赤木 緑川さんと重なりますが、私も中学校のときは、別に仲が悪いわけではありませんが、クラスの中にいると特定の子と固まり、その子たちと端のほうにいる感じのタイプでした。

人前で話すように言われると話しますが、このようなことは向いていないと考えがちで、積極的に前に出ることはほとんどありませんでした。

高校に入って、実際に地域活性化活動をして、私もいろいろな場所でプレゼンテーションをたくさん経験させていただきました。

本格的にプレゼンテーションに参加し始めたのは、二年生の途中からです。

最初はとても緊張していました。自分にできるのだろうかと思っていました。とても緊張するし、失敗したときはどうするのかということや不安がありました。

プレゼンテーションをしていくうちに、自分がどんどんプレゼンテーションをすることがうまくなっていることを感じるようになりました。先生方も「ここがよかった」と誉めてくれました。自分にもこういうことができるのだと自信につながりました。

高校生になって初めて大勢の前で話すことになりました。最初は本当に不安や緊張ばかりでしたが、三年になって、それがほとんどなくなりしました。

この前も大阪と福岡の地域みらい留学のイベントに参加させてもらって、そのときもプレゼンテーションをさせていただきました。このときに初めてアドリブで説明しました。

私はアドリブがうまありません。でも、実際に行ってみると自分が思っていた以上に上手にできました。

地域みらい留学では大阪で八回、福岡では四回プレゼンテーションを行いました。

回数を重ねていくと、ここは言わなくてもいいかもしれないというように、自分で取捨選択ができるようになります。

そうやって自分で言うところを選別して、どうすれば効果的に伝わるのかを考えることができました。回を重ねるごとに、自分のプレゼンテーションがうまくなっていると感ずることができました。

——地域みらい留学では、どのようなところに一番力を入れてプレゼンテーションをしましたか？ 何を伝えることに集中しましたか？





赤木 とにかく大三島分校は楽しいということです。

先ほど入学前の話をしましたが、以前は自分が卒業できるまで無くならなければいいぐらいの感覚でした。島の学校ではそれほどできることはないという偏見があり、他校のほうが楽しいかもしれないと思っていたところがあります。

しかし、大三島分校に実際に入って、いろいろな活動に参加していくたびに、大三島分校がとても楽しくなりました。

島だからというマイナスのイメージはありません。

地域みらい留学では「本当に楽しい」という気持ちで外部の人に伝えたいと思いつつプレゼンテーションをしました。

——自分が楽しいと思ったことをそのまま伝えましたか？

赤木 はい。とにかく大三島分校は全力で楽しめて、他の学校に全く負けないぐらいにいろいろな行事もあり、自分が変わることができる場所でもあるということを伝えました。

柴田 私は自分のコミュニケーション能力がとて上がったと実感しています。

イベントに行くと、知らない人ばかりです。そのワークショップでいかにして自分の意見を相手に伝えるかが重要です。そしてチーム内で雰囲気づくりをする上でもコミュニケーションは必要なので、常に積極的にコミュニケーションを取ろうとしたことで、その能力が向上したように思います。

吉住教諭 イベントではパンフレットを配って頑張ってPRをしていましたね。

柴田 島しょ部高校生による地域おこしイベントでは、興味を持ってもらうと自分たちのイベントブースまで足を運んでもらえます。通る全ての人に声をかけて通行人をキャッチして、面白いイベントがあるということを言いながら、そこに誘導することをしました。

——柴田さんは今、チームでコミュニケーション能力が必要だと言いましたが、チームではいつもどのような役割ですか？

柴田 お笑いというか、いつもムードメーカーの感じの立ち位置です。いじられキャラのような感じです。

——どんなことを伝えることが楽しかったですか？

柴田 私はすぐに気持ちや考えが表情に出るタイプで、自分が楽しいことを伝えているときには自然と笑顔になります。

聞いてくれる人も笑顔になっていて、「楽しそう」ということを感じてもらえてうれしかったです。

——他の人を一緒に楽しくする感じですか？

柴田 そういう感じです。中学校時代に比べて積極的になりました。



分校と島、高校生にとっての地域、地域のためにしたいこと



【自分にとって分校は、島は】

寂れていくのは嫌だ。どこに行っても帰ってくる島。

【高校生にとって地域は】

分校が地域の人に愛されていることが分かった。地域の人から応援されるとうれしい。大三島分校で頑張っているとたくさんの声を掛けてもらえる。

とにかく人とのつながりが深くて温かい。

【したいことは】

分校の良さや地域の温かさを外部の人に知って欲しい。分校にも島にも興味を持つて欲しい。責任感が身に付くことや将来の役に立つ経験ができること、楽しいことを伝えたい。地域の伝統のよさなものを守っていききたいということを思い始めた。

——地域についての思いを教えてください。

青山 私は生まれてからずっと大三島に住んでいます。周りからずっと大三島は良いという評価を聞いてきましたが、私は「普通なのにとこがいのだろう?」と思いながら今までは過ごしてきました。

しかし、活動していく中で大三島は人も良いし、それを取り巻いて

いる環境もとても良いと思うようになりました。

先ほど緑川さんが話していた夕涼み会の活動のときも、島の人たちから「島を良くしたい」と、一緒に何かの活動をしたいということを聞きました。私も大三島がこのまま寂れていくことは嫌だとあらためて感じました。

分校がなくなると、大三島自体は絶対に今よりも活気がなくなります。そうはしたくないので、大三島分校の良さも感じてもらい、地域の温かさや過ごしやすさを外部の人に知ってもらいたいと思います。

——大三島分校が地域にとって大事だ、と入学した後に思いましたか？

青山 入学する前は周りが大三島分校のことをあまり話題にしていなかったで、それほど分校について知る機会がありませんでした。

姉が大三島分校に入学したのをきっかけに、大三島分校のことを知りたくなって、教えてもらいました。そして、大三島分校がどれだけ地域に貢献していて、また地域の方々から愛されているのかということが分かりました。

——青山さんは後輩に大三島分校を勧めますか？

青山 はい、もちろんです。

今治北高校や今治南高校のような大きな高校は、こんなには地域に貢献していないというか、人も多いし、絶対に埋もれてしまうと思います。

大三島分校は少人数で、自分が動かなければ何も進まないで、責

任感が身に付きます。またここにいたほうが絶対に将来の役に立つ経験ができるし、楽しいと思える——という感じで勧めます。

緑川 大三島は本当に人が温かいです。

私は小学校五年生のときに香川から引っ越してきました。ここに比べると、少し都会でした。

香川のときはすれ違ってもあいさつするかしないかのレベルでしたが、大三島に来たら、すれ違う人みんなが「いってらっしゃい」や「おかえり」と声をかけてくれました。

昨日もスーパーに行くと、「緑川さん」と言われて、誰だろう？ と思いましたが。その人には「テレビで見えています」と言われました。本当に誰だろう？ と思いながら、適当に話していました（笑）。

本当にそれぐらい声を掛けられます。

写真部に入っていますが、去年も全国大会に行きました。いろいろなメディアに取り上げてもらって。それを見た地域のかたがたが「頑張っていますね」や「応援しています」と声をかけてくれることがとてもうれしいです。そのように声をかけてもらおうと、自分も頑張ろうと思います。大三島を盛り上げたいと思いますし、大三島が好きです。

——緑川さんは地域の人から注目されている感じですか？

緑川 はい。その辺を歩いていても、「緑川さん」「テレビで見ました」と声をかけられます。

赤木 スーパースターのようです。

吉住教諭 岡村島に行ったときにも握手を求められていました。

緑川 「テレビで見ました。握手してください」と言われます。

岡村島でもみんなが見てくれると思って、頑張ろうと思いました。

——自分のために頑張ることもあるかもしれませんが、高校のためや地域の代表のような感じで背負うものはありますか？

緑川 背負っていると言えば、背負っていますか？ ねえ、先生。

吉住教諭 去年の写真甲子園では、全国に大三島のことを知ってもらいたいという思いもありましたよね。

緑川 「私たちの大三島」というテーマで、過疎化や少子高齢化といった問題を抱えながら、それでも私たちが愛してやまない大三島の姿を八枚組にまとめて全国大会に出場しました。

その写真を撮るときは、最初はただ楽しいと思って撮っていました。が、あらためて見返すと、大三島をより多くの人に知ってもらいたくなくしたくない、寂れてほしくないなど、いろいろな感情が湧き出てきました。

実際にその写真を見てくれた方が、「こんな美しいところならぜひ大三島に行ってみよう」と声をかけてくれました。

それがとてもうれしかったので、これからも大三島をテーマに写真を撮ろうと思っています。

——図書室に写真甲子園のマンガがありました。あれは関係がありますか？

緑川 『シャッターガール』ですか？

——そうです。

緑川 あれは写真甲子園の全国大会に出場したときの私たちの様子がマンガ化されたものです。

——かっこいいです。

吉住教諭 今年三一人の新入生が集まらなければ廃校が決定という状況の中でした。分校の存続がかかっていました。

私は意図していませんでしたが、彼女たちがインタビューの中で、とにかく自分たちが写真甲子園に出ることによって大三島の名前を広げて、廃校の危機を救いたい、という話をしました。そこにメディアが興味を持つてくれました。

最初は数校ある取材校の中の一校の予定でした。

それがふたを開けてみると、完全に大三島分校が中心になり、『シャッターガール』たちが大三島分校の未来を救うようなストーリーになりました。

結果として定員一杯の四〇人が入学してくれました。現実がマンガ化された感じです。



——ただ者ではありませんね。サイボウズとつながることになったり、漫画の主人公になったり。

吉住教諭 本当に生徒の力は、私たちの想像をはるかに超えたすごいものがあるように思います。

二神分校長 サイボウズもそうですが、去年は元サッカー日本代表監督の岡田武史さんが、学校の存続に協力したいということで、今治市長さんたちとここまでわざわざ来てくれました。

これも子どもたちの力です。われわれがいくら言っても来ていただけません。

——私たちが来たこともそうです。

次は赤木さん。地域についての思いを語ってもらえますか？

赤木 とにかく活気があふれていてほしいです。

入学する前の話になりますが、大三島分校がなくなること自体に、私は正直ほとんど関心がありませんでした。

しかし実際の地域活性化活動を通して、大三島分校がなくなると、どれだけ良くないことが起こるのかを知りました。

とにかく今は大三島分校になくなってほしくないです。この島に活気がなくなってしまう。

どこに行ったとしても、自分が帰ってくる島です。ここが自分の故郷ということは変わりません。帰ってくるときに活気がなければ寂し



いです。

今は昔よりも店が増えましたし、人も増えた感じがあります。それが続いてほしいと思います。

緑川さんや青山さんも話していましたが、とにかく人が温かいです。大三島分校には地域の人の関わりがすごくあります。

実際に私も大三島分校で頑張っていると、たくさんの方から声をかけてもらえます。分校生が何かをするとなると「私たちにも何かできることはないですか？」と地域の人が声をあげて協力してくれます。

去年から大三島分校の全国募集を始めました。

県外からの子は遠いので、どうしても下宿になると思います。

その下宿先をどのようにするかということが課題となっていました。寮を造ることが話題に出ていましたが、なかなか難しい部分もあって、どうしよう？ となったときには、地域の人たちが学校に集まって、大三島分校の存続について話し合いを持ちました。

島のために「こうしたほうがいいのではないかと、みんなが全力で案を出してくれました。

下宿のことも「協力できることは何でもするよ」と声をかけてもらったようです。

今、下宿している生徒は四人います。

いろいろな方が協力してくれて、実現できたことがたくさんあります。

夏休みの夕涼み会も、地域の人の協力があつて成し遂げることができました。今年も行う予定ですが、地域の方々も楽しみにしてくれていて、「また開催してください」と声をかけていただきました。

とにかく人とのつながりが深く温かいです。

——今、赤木さんにとっての楽しみの話と、学校存続の話と、大三島の話の三つの話題が出てきました。赤木さんにとっては、重なる部分が大きいですか？

赤木 地域活性化で自分がプレゼンテーションに行くことは、自分の能力の向上にもつながりますし、大三島分校のPRにもなります。大三島分校に興味を持ってもらうことで大三島にも興味を持ってもらえます。

大阪や福岡に説明会に行っても、結構、興味深く聞いてくれる方が多いです。

「大三島分校は楽しそうですね」と言ってくれた方もいました。手応えがあるというか、本当に私たちの活動に関心を持って聞いてくれる方が多かったので、うれしいと思いました。

——事前に先生方や地域の人と話をしていて、みなさんの活動の中で、大三島分校の存続、地域活性化、本人が楽しい、という三つの要素があることが分かっていました。

四つ目の要素として、生徒のみなさんが自分自身の成長や向上をととても実感していることはすごいと思って話を聞きました。

柴田みのるさんはいかがですか？

柴田 感じ方が変わりました。

島だと遊ぶものが海や山に限られてバリエーションがないので、幼い頃は外に出たいという気持ちがとても強かったです。





「私たちの大三島」より（写真甲子園 2018）

しかし高校で地域活性化についてのいろいろな取り組みをしていくうちに、島はいいと思うようになりました。面白いと感ずることが多くなつて、島を誇りに思うようになっていきました。

分校長先生も言っていました、都会に比べて島には島のゆつたりとした時間が流れていて、とてもラフな感じがして、私は好きです。

地域でも祭りが盛んです。私たちの地域は祭りで化粧をしますが、小さい頃はそのことが嫌で、早く祭りをやめたいと思っていました。

高校生になると、地域の伝統のようなものを守っていきたいと思い始めました。

——最初、中学の頃は遊びたかったですか？

柴田 そうです。

——遊びたいというのは、イメージ的にはイオンなどの感じですか？

柴田 そんな感じです。島にテーマパークとかデパートとか、何かつくればいいのにと思いました。

——それよりも違うことのほうが楽しいと思えるようになりましたか？

柴田 島で起こる一つ一つがとても面白くていい経験にもなります。ちよつとしたことでも喜びとか、楽しさを感じるようになりました。

——何が一番面白かったですか？

柴田 感じ方が大人になりました。

小さい頃に海を見ると、ただ海だと思っていました。今、夕日や海を見ると、きれいだと思います。当たり前ですが、島のワンシーン、ワンシーンが胸にぐっと来る感じがです。

——柴田さんは写真を撮りますか？

柴田 趣味で写真やムービー撮影をしています。

今度したいことは、私目線のムービーを作ることができればいいと思います。

将来の地域との関わり方は——外に出る、そして島に帰りたい



「私たちの大三島」より（写真甲子園 2018）

【外の経験では】

都会に出てまた戻ってきたときに、何か別の感じ方のようなものがあると思っている。

【帰って来たい】

将来の夢はどこでもできる感じ。島に帰ってきて仕事を続けながら老後を過ごすこともいいと思う。

将来ここに帰ってきたい。なぜかという、島にいと守られている気がするから。

ここが唯一の自分の故郷になるので、帰ってくることはできるときは帰ってきたい。

【帰ってからすること】

見守る立場になりたい。

世界のことを持つて帰ってくる。おじいさんになって、世界の話をしたい。

——高校を卒業した後、みなさんは島を出ると思いますが、将来は地域とどのように関わりたいですか？

青山 卒業した後、いったんは出ます。

その後ここに帰ってくるという感じではありません。

できれば少し外の雰囲気というか、ずっと島の田舎暮らしだったので都会に出て、またこちらに戻ってきたときに、何か別の感じ方のようなものがあると思っています。

私が中学校一年生や二年生の頃に比べて、今の大三島は本当に店が増えたとし、若い人も増えたと感じます。

大三島分校だけではなく、大三島分校と地域の人が協力した結果だと思っています。私が大三島に帰ってくるタイミングにも、大三島が活気にあふれ、分校が存続してくれているといいと思います。

緑川 大三島には進学先はないので、私も絶対に外に出なければいけません。島外に出て、専門学校に行つて、おそらく島外で働きます。

私の希望は、退職してから大三島に戻ってきて、今、周りにたくさんいるおばあさんたちのように子どもを大切にして、「いつてらっしゃい」と声をかけるような立場になりたいと思います。

一回は外に出ますが、老後は大三島に帰ってきて、子どもを見守る立場になりたいと思います。

赤木 私も進学先のことを考えると、どうしても一度島外に出ることになります。

自分が生まれた島なので、進学をしても帰ってくる事ができるときは帰ってきたいと思います。

都会に比べると店は少ないかもしれませんが、向こうでできた友達に遊びに来るように誘うことができればいいと思います。

私が進学で島外に出ると、親が家で一人になってしまいます。

姉はもう働いています。兄は大阪にいますが、とても離れています。私の親は性格的に寂しいということを全く言いません。それを悟らせない感じのタイプです。

実際にどのように思っているかは分かりませんが、親自身も実際に一人になれば寂しいのではないかと思います。私もいろいろと迷惑ばかりかけていたこともあります。ずっと一人にしておくよりは、帰ってくる事ができるときぐらいは顔を出したいと思っています。

私が目指している将来の夢は、地域のために何かができるという直接的なものではありません。

もし自分の夢をかなえることができ、少し落ち着いたときに、島に帰って住むこともいいと思います。実際にそうなるかどうかは完全に決めていませんが、島に帰って仕事を続けることもいいと思います。

――将来の夢は何ですか？

赤木 私は絵を描くことが好きです。イラスト関係の仕事に就く事ができれば、と思っています。

――逆に言うと、ここでもできますよね。

赤木 そうです。イラストだとインターネットでも依頼を受け付けてできます。場所を意識することなくできると思います。

まだ確実に決まっていますが、いつかはここに帰ってきたいと思っています。



「なついろ」より（写真甲子園 2018）

柴田 私も将来はここに帰ってきたいと思っています。

島にいと守られている気がします。地域の人やこの学校の先生たちに守られていて、島の外の世界を体感できないままだと、面白い人生を送ってしまいます。

私は外の世界のいろいろな国々に憧れています。世界でいろいろな旅をして、将来は島に帰ってきたいと思っています。

島に守られているので、世界のことを持ち帰ってきます。おじいさんになって、世界の話をしたいです。別に島が悪いわけではありませんが、人生の選択肢は知っていなければ広がらないということが私の中にあります。

青山・緑川 かつこいいです。

柴田 島の子たちに世界のことを話し、子どもたちの選択肢が広がるといいなと思います。それでも島が好きと言って、残ってくれる子がいるとうれしいという思いもあります。

地域で子どもたちに話すことができるおじいさんになっていきたいという思いがあるので、島に帰ってきたいと思います。

——柴田さんはどんな職業に就きたいですか？

柴田 自衛官になろうと思っています。人助けというか、人の役に立つことが好きです。おじいさんになっても、地域の人々や子どもたちの役に立ちたいという思いがあります。



「出会い」より（写真甲子園 2018）

小さな学校の熱い教育



・みんながイベントに興味を持ち、興味の輪が広がり、楽しく行う。
・いろいろなアイデアを出し、イベントをつくり上げる。
・大三島分校は先生が親身に分かるまで一対一で教えてくれる。
・塾に行っている子はほとんどいない。大三島分校が塾のようなもの。
・全員参加の感じ・誰かがしゃべっていないことはない。みんな
でしようという感じ。

——地域活性化の取り組みをしているときの同級生との関係はどうですか？ 盛り上がる感じですか。あるいは、じっくりと深くいく感じですか？

柴田 みんながイベントに興味を持って、どのようなことをするか、話し合いながら興味の輪が広がっていきます。みんなも興味を持って、楽しくやっています。

——誰かが「こういうことをしたい」と言つと、「いいですね」という感じで手伝ってくれますか？

柴田 高校生ではありますが、夕涼み会も私たちが企画しています。いろいろなアイデアを出して、「それはいい」「もう少しこうしたほうがいい」というように、みんなが積極的に話し合ってイベントをつくり上げました。

——「私は塾があるので帰ります」「ピアノの練習できようは駄目」ということはありますか？

柴田 そんなことはありません。

赤木 ほとんどいません。

青山 大三島分校は先生がとても親身に教えてくれます。分かるまで一対一で教えてくれます。

赤木 塾に行っている子はほとんどいません。

青山 大三島分校が塾のようなものです。

赤木 強いて言うのであれば、バスの最終便の時間です。でも、先生が送ってくれることもあります。

柴田 みんな基本的に最終便までいろいろやっています。

赤木 ギリギリまでいます。

柴田 「あと五分だ！」と言って、ダッシュで行きます。

——一緒にやっていてどうですか？

青山 今までしてきた感じでは、みんなでたくさん案を出します。本当に全員参加のような感じですよ。誰もしゃべっていないということがありません。みんなでしようという感じですよ。

論考

地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化

青山学院大学 樋田 大二郎

大三島分校は、正式名称は愛媛県立今治北高等学校大三島分校であり、瀬戸内海のしまなみ街道沿いの大三島にある。大三島は、かつて

は島の西半分が大三島町、東半分が上浦町の二町に分かれていたが、平成の大合併の折に今治市と合併した。人口は一九四七年（昭和二十年）にピークの二万三千四百人まで達した。その後は減少に転じて二〇一五年（平成二十七年）の国勢調査では、およそ五千七百人になっている。

一九四八年（昭和二十三年）に愛媛県立大三島高等学校並びに瀬戸崎分校として設立され、その後分校を廃止しつつ募集定員を増やし、一九六三年（昭和三八年）には第一学年募集定員が二百名と最大数になった。

その後は募集定員を減らし、平成一七年には愛媛県立今治北高等学校

校大三島分校と名称変更し、第一学年募集定員が四〇名となった。

大三島分校の地域に根ざした取り組みは全国の高校魅力化の取り組みのモデルとなるものであるが、取り組みには次の背景がある。

第一は、上述のように島嶼部の高校であることである。島嶼部という条件不利地域に立地しているので、交通の便が悪いこと、人口減少が激しいことが生徒募集を困難にしている。しかしその反面で島嶼部の高校であることは、自然が豊かでマリンスポーツを教育に取り入れることができること、および、地元コミュニティのまとまりがあり地元が強力に高校を支援すること、という長所をもたらしている。

第二の特徴は、廃校の危機と向かい合わせであることである。少子

化による生徒数減少の波が押し寄せる中、各都道府県は高校の再編整備の検討基準を設けている。愛媛県の県立学校再編整備計画基準では、(一)生徒数の減少、(二)生徒の多様化、(三)市町村合併の進行、(四)県財政の悪化の課題を踏まえて、分校は「入学者数が三二名に満たない年が三年連続と翌年度からの生徒募集を停止する」とされている。地元の大三島の中学生数が少ない現状を考えると、三一名は少なくない人数である。

しかし廃校の危機と向かい合わせであることは、大三島分校の長所になっている。いわゆるピンチをチャンスにの言葉通りに、危機感が意欲的な高校改革を可能にし、また、町民の支援を掘り起こして大三島分校の魅力化を促進させている。

大三島分校は、今や先進的で、元気で、地元から愛される魅力的な高校である。第2号に収録した教務主任の吉住牧人先生のご寄稿「愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組——地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して——」にあるように、大三島分校は「大三島の歴史や文化等の調査・研究」、「地域活性化に関するワークショップ」、「瀬戸内海島嶼部高校の意見交流」、「高校生の手による地域活性化のイベントの立案・実践」を柱に、毎週のように地域活性化の取り組みを行っている。

大三島分校は、県立学校再編計画が示した四つの課題のうち、(一)生徒数の減少については、本土や全国からの生徒募集を行うことで克服している。(二)生徒の多様化については、小規模校であることを長所として一人一人のニーズに対応した教育を行っている。さらに、本土や全国からの生徒が入学することや、全国の高校、地域、組織と交流することで、生徒の学びと進路の可能性は広がっている。カリキュ

ラムが社会に開かれることで、地元地域や都市の多様な素材が教材となっている。(三)市町村合併の進行に関しては、平成の大合併で、大三島にある二町が今治市の一部となった。このことにより、大三島分校は今治市にある一〇校ほどの本校と分校の内の一校にすぎなくなつたが、大三島にとっては島に一の校の高校である。このため今治市との合併後も大三島の住民は共同体を維持している。生徒インタビューの中に出てきた夕涼み会(夏祭り)の復活は、むしろ共同体の絆が強まっていることを示している。

第三の特徴は、地元が活性化の途上にあり、元気なことである。元気なUターン者とIターン者が島で家業を継承したり、起業したりしている。さらに多くの関係人口が島の活性化を支援している。このことは生徒インタビューの中で語られたように高校生も感じており、生徒の地域活性化の取り組みの動機付けともなっている。

夕涼み会は、高校教員を含む元気なUターン者とIターン者が飲み会の中で、かつて大三島にあった夏祭りを復活させたいと話が盛り上がったことがきっかけである。メンバーの一人であるUターン者が語ったところでは、自分が高校時代にお祭りで浴衣を着たのと同じように今の分校の高校生にも浴衣を着させてあげたいと思ったのが夏祭り復活の動機であったという。

こうして、Uターン者とIターン者、高校生が協力して、島民を集めた大イベントが企画・運営された。

さらに、定住者ではないが、世界的建築家の伊東豊雄氏は関係人口として大三島分校の生徒と地域活性化を行っている(前述の吉住牧人教務主任の寄稿文を参照されたい)。

伊東豊雄氏以外にも、F C今治オーナーの岡田武史氏、サイボウズ社長の青野慶久氏も大三島分校を支援している。



高校活性化と地域活性化は車の両輪である。大三島分校の活性化は地域活性化と連動している。

地元から高校がなくなるとは、地元コミュニティにとって重大な損失である。高校生は地域の元気の象徴であり、様々な行事の担い手でもある。高校がなくなると、UターンやIターンへの負の影響があるとも言われている。

さらに、近年の地域の特色を生かした教育では、高校生が地元市町村に出て、市町村の資源の活用を行うことで地域が活性化されることが分かってきた。地元で地域活性化と連動する魅力化の高校がないことは、高校をエンジンとする地域活性化のメカニズムを作動させることができなくなることの意味する。

都道府県の高校再編整備の運用では、高校が存続することの意義を考えて、ルールの弾力的な運用が行われる。そして、高校の再編整備に至る前に、生徒の全国募集、市町村と県立高校の協働による「高校魅力化」を行う動向が生まれている。その際、高校魅力化の動向を全国規模で牽引（当人たちは伴走という表現を用いる）している団体や仕組みとして、私の知人がかかわっている範囲でいうと、文科省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームの「地域未来留学フェスタ」等の活動、認

定NPO法人カタリバの「マイプロジェクト」、株式会社プリマペンギノの公設塾支援などが高校魅力化を牽引している。

大三島分校の高校魅力化で興味深いことは、全国規模のモデルや仕組みを活用することに積極的ではないことである。大三島分校は、文科省の事業への申請をしていないし、マイプロジェクトにも参加していないし、プリマペンギノの公設塾支援も受けていない。上述の全国規模のイベントやシステムの中では、全国募集のために地域未来留学フェスタへ参加していることが目立つ程度である。

大三島分校を訪問して印象的なのは、大三島分校の獨創性、内発性、自主性、積極性であり、それらの結果としての創造性や地域性であった。大三島分校は、地域とのつながりがあり、地域の活性化をエネルギー源にし、普遍的でないし教科書的でないということが特徴である。廃校危機の回避策として、地域の内発的な動向と連動していることや、地元行政や地元住民、そして関係人口である島外の企業・組織などの資源を活用することが大三島分校の魅力化の特徴なのである。前述の吉住牧人先生のご寄稿にあるように、大三島分校は様々に地域とのかわりを持っている。



『地域人材育成研究』第2号は、大三島分校生徒へのインタビューで得られた資料を掲載し、さらに、同校の吉住教諭からいただいた貴重な寄稿を掲載した。これらによって、地域との協働による高校教育改革が、生徒にとってどのような意義があるのかを明らかにすること

が『地域人材育成研究』第2号の使命である。インタビュー対象となった生徒は、大三島分校での学びから、自分に自信を持ち、自分を表現し他者とかかわることができるようになった。さらに、地域と触れ合う機会を得て、地域からの期待を感じ、地域を好きになり、地域と協働することを好きになった。これらの結果として将来の地域人材としての基礎を形成していた。

最後になりましたが、インタビューに協力していただいた今治北高等学校大三島分校の生徒さん、分校長二神弘明先生、教務主任吉住牧人先生、振興対策課長阿部潤也様他の多くの先生方、地元住民の皆さんに感謝いたします。

※なお、『地域人材育成研究』第2号に掲載した写真は大三島分校に提供していただきました。ありがとうございます。

〈参考文献〉

地域教育魅力化プラットフォーム編 二〇一九『地域協働による高校魅力化ガイド』社会に開かれた学校をつくる』岩波書店

愛媛県教育委員会 二〇〇八『愛媛県立学校再編整備計画』

福永健 「ふるさとあしたへ」入学生の全国募集 今治北高大三島分校 廃校危機を回避『読売新聞』二〇一九年一月一四日朝刊大阪版 三三三頁

樋田大二郎 二〇二〇年一月「関係人口になることの背景と意義」『ていくおふ』No. 一五八 二八—三三頁

樋田大二郎 二〇一九「町民を本気にさせた発表会…特集 地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」」『魅力を発信 地域の中心に高校がある』

『舞たうん』一三九号 公益財団法人えひめ地域政策研究センター 一—五頁

樋田大二郎 二〇一九「地域を愛し地域から愛される学校を目指して…特集 地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」」『魅力を発信 地域の中心に高校がある』

『舞たうん』一三九号 公益財団法人えひめ地域政策研究センター 一—五頁

樋田大二郎 樋田有一郎 二〇一八『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト』地域人材育成の教育社会学』明石書店

樋田有一郎 二〇二〇「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える—学習目標と学習効果の整合性に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 二七号 二 早稲田大学大学院教育学研究科 五一—六三頁

吉住牧人 二〇一九「地域を愛し地域から愛される学校を目指して…特集 地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」」『魅力を発信 地域の中心に高校がある』『舞たうん』一三九号 公益財団法人えひめ地域政策研究センター 一—五頁、一四—一五頁

吉住牧人 二〇一九「地域を愛し地域から愛される学校を目指して…特集 地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」」『魅力を発信 地域の中心に高校がある』『舞たうん』一三九号 公益財団法人えひめ地域政策研究センター 一—五頁、一四—一五頁

寄稿

愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組

——地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して——

愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課教職員係管理主事

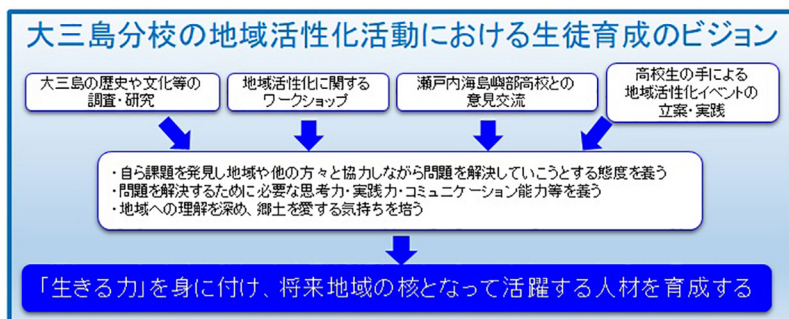
(元愛媛県立今治北高等学校大三島分校教務主任／令和二年三月まで)

吉住 牧人

1 大三島分校を取り巻く現状

本校は、広島県との県境、愛媛県の最北端に位置する大三島に、昭和二三年愛媛県立大三島高等学校として設立され、今日まで地域を支える人材育成の拠点として歩んできた。近年は過疎化、少子高齢化の影響で生徒数が急激に減少し、平成一七年に愛媛県立今治北高等学校大三島分校として再編され、現在に至っている。愛媛県が定めた県立学校再編整備計画基準では、「一学年の入学生が三〇人以下の状況が二年続き、その後も増える見込みがない場合は募集停止を行う」という厳しい条件が設定されており、これまでも大三島島内のみならず、今

治市内をはじめとする島外の生徒にも積極的に声をかけ、入学志願者の増加に努めてきた。しかし、平成二九・三〇年度入試において二年連続で入学者が基準を下回り、これまで以上に志願者を確保する必要があるため、平成三一年度入試から全国募集を開始するとともに、学校のさらなる魅力化と県内外での学校のPR活動を積極的に行った。これらの取組が功を奏し、平成三一年度は基準を大きく上回る四〇名の生徒が入学し、当面の廃校の危機は脱することができた。とはいえ、地元大三島中学校の生徒数は、現三年生が三六名、現二年生が二一名と減少の一途をたどっているなど、生徒募集に係る課題は山積している。



2 本校の教育活動のねらい

大三島は少子高齢化が進行し、若者の数が急速に減少している。現在、島内の人口は六千人ほどであるが、その約半数が六五歳以上の高齢者であり、七五歳以上の後期高齢者の割合も約三〇％と極めて高い。島内の子ども数が減少し続けている昨今の状況を踏まえると、今後も安定した生徒数を確保していくためには、目の前の生徒募集に力を入れることのみならず、島への移住者や島に残る若者を増やすといった、中・長期的な視点での取組も必要不可欠である。また、政府の教育再生実行会議が二〇一九年五月にまとめた第一次提言では、高等学校普通科の改革について言及されたが、その改革の骨子として、画一化された教育カリキュラムから脱却し、各学校で特色のある教育活動を実践するよう提言されている。グローバル化やAIなどの技術革新が急速に進む予測困難なこ

れからの時代には、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められる。

学校が生徒にとって真に魅力ある場所になるためには、特色ある教育活動の実践を通して、生徒が望ましい成長を遂げられることが大切である。また、入学志願者の確保のためには、本校でしか行えない学びの実践とその情報発信が特に重要となってくる。これらのことを踏まえ、本校では地域資源・地域人材を活かした島ならではの特色ある教育活動の実践を通して、「生きる力」を身に付け、将来地域の核となつて活躍できる人材を育成することを学校の最も重要な教育目標の一つに掲げ、学校の魅力化に取り組んでいる。

3 本校の教育活動の実際

(1) 地域資源・地域人材を活かした島ならではの教育活動

本校では、地域を愛する心を養い、心身ともに健全で豊かな感性を持った生徒を育てることを目標として、島ならではの楽しく充実した教育活動を実践している。具体的には、島を三年間かけて一周する島内歩行大会、学校裏の海で行うマリンスポーツやボート大会、地元の板前さんを講師として招き、魚の捌き方を一から学べる調理講習会などがある。これらの教育活動は、生徒たちからも大変好評で、特にマリンスポーツについては、この活動を目当てに本校を受験する生徒も

数多くおり、本校にとって欠くことのできない教育活動の一つである。

（2）これまで取り組んできた地域活性化活動

高校生の手で地域を盛り上げていくため、本校では各種団体等と協力しながらこれまでに以下のような活動を行ってきた。

ア 大山祇神社参道のボランティアガイド

平成二五年度に本校が実施した「地域活性化プロジェクト」の一環として始めた活動である。宮浦港から大山祇神社までの参道を歩きながら、観光客の方に、あまり知られていない参道の歴史や文化を紹介している。ガイドメンバーは有志の生徒約一五名で構成しており、ガイドを実践する前には、地域の歴史学習やコースの下見、役割分担の



マリンスポーツの様子

確認等を行って本番に臨んでいる。聞き取り調査やガイド活動を通して生徒自身が大三島の魅力を再発見するとともに、それらを多くの人に知ってもらうことで観光客等の増加につなげることを目標に掲げている。今年度は外国人観光客に対しても英語でガイドができるスキルを身に付けるべく、ガイド実践生徒に対して英語科教員による個別指導を行っている。まだまだ技術は未熟であるが、改訂した英語版パンフレットの抜き刷りを用い、教員の助けも借りながら外国人向けのガイドを実践している。

【参道ガイド後にいただいた手紙】

私は、先日の大三島参道マーケットで母校の歴史ガイドの皆さんにお世話になった者です。島を離れて以来、五〇年余りに島を歩きました。

お店を見ながら聞かせてもらった説明がなつかしい記憶を次々と驚くほど蘇らせてくれました。パンフレットもよくここまで調べ上げられましたね。生徒さんのお名前を見てひよっとしたら知り合いのお孫さんもいらつしやるのだとは思いつつ、じっくり読ませていただきました。

お一人お一人が全力で島の力になってくれていることがしつかり伝わりました。同じく卒業生の姉との電話のやりとりも、いただいた冊子を見ながら今までにもましてふるさとを熱く語り合うようになりました。

（中略）

観光に来られた人達だけでなく、長く島を離れていた私たちも感

動させてもらえる素晴らしい活動だと思います。ありがとうございます。

イ 伊東建築塾との協働「島デザイン部」

伊東建築塾は世界的建築家の伊東豊雄氏が塾長を務め、建築を通じて「大三島を日本でいちばん住みたい島にする」というコンセプトの下、様々な地域活性化活動を行っている。本校も伊東建築塾と協働して様々な地域活性化活動に取り組んできたが、毎回全校生徒の半数近い数十名の生徒が活動に参加してきた。これまでの活動事例を以下に示す。

二〇一三年度

宮浦新地区の昭和三〇年代の「イラストマップ」と「街並み模型」の制作

二〇一四年度

旧法務局の建物を島内外の人が気軽に立ち寄れる場「みんなの家」として改修

二〇一五年度

小規模作業所「さざなみ園」で使う椅子作り

二〇一六年度

熊本地震の被災地に送る椅子の製作、住民やサイクリストらが気軽に集える「島の休憩所」を改修

二〇一七年度

公民館の「めがね椅子」をリフォーム、旧小学校の木造校舎を利用した宿泊施設「大三島憩の家」のリノベーション

二〇一八年度

大山祇神社参道入り口に参道紹介の看板を設置、「紙で理想の家を作る」ワークショップへの参加

二〇一九年度

県外生徒のための下宿を改修、「参道の空き家の有効活用」に関するワークショップへの参加

ウ 瀬戸内島嶼部高校との意見交換会や地域PRイベントの創出

平成二六年度から、瀬戸内島嶼部の愛媛県と広島県の高校が集まり、地域活性化についての意見交換会を行っている。昨年度は広島から四校と愛媛から四校の計八校が集まり、道の駅多々羅しまなみ公園で高校生による地域PRイベントを開催した。

このイベントでは、伊東豊雄氏と高校生との地域活性化に関するトークセッションも併せて行われた。

今年度は、愛媛、広島、高知、岡山の四県二〇校と交流活動を行った。

エ 地域おこしイベントの創出

大三島に活気が溢れていた時代の夜市を復活させ、大山祇神社参道に賑わいを取り戻そうと、地域の方々と協力して「夕涼み会」を開催し、地域の方々から好評を得た。ブース内容の多くは分校生のアイデアであり、準備・当日の運営・片付けまで多くの分校生が関わって作り上げた手作り感満載のイベントであった。

オ 大三島紹介パンフレット「私たちの大三島」の作成

島の魅力を多くの人にPRするとともに、生徒の地域活性化への意識を向上させることなどを目的として、高校生目線で島の魅力を紹介したA5版六四ページのパンフレット「私たちの大三島」高校生が伝える大三島の魅力」を作成した。完成したパンフレットは島内外の各所に配架させていただいたり、高校生自らが配布しながら大三島の



作成した英語版パンフレットの一部分

PR活動を行ったりしている。今年度は改訂版及び英語版パンフレットの作成を行った。

カ「大三島お仕事図鑑」の作成と移住者への情報提供

今年度は伊東建築塾や商工会、各事業所等の協力の下、島内の職業についての調査・研究を行い、B5版三二ページのパンフレットを作成した。大三島の職業に対する取材、調査及び移住者への情報提供を通して、大三島への移住者の増加を図るとともに、生徒自身が大三島における雇用や産業の現状や明るい展望を感じ取り、将来大三島に定住したいと考えられる人材を少しでも増やしたいと考えている。

キ「高校生大三島定住促進アンバサダー」の育成

島の定住人口を増やすために、大三島の魅力や仕事などについて、島内外の各所でPR活動を行うことを想定した広報大使「高校生大三島定住促進アンバサダー」を育成している。今年度は準備段階であったが、次年度以降は東京、大阪で開催されている移住フェアにおいて、「私たちの大三島」や「大三島お仕事図鑑」等のパンフレットを用いて、移住希望者に対する大三島の仕事や魅力などの情報発信をはじめとする積極的な働きかけを行いたいと考えている。また将来的には、今治市の地域振興課や地元企業と連携して大三島移住促進ツアー等を企画、立案するとともに、島を訪れてくださった方々のエスコートも担当したいと考えている。

(3) 学校存続に向けたPR活動

ア 県内外での学校説明会

昨年度は本校独自で学校説明会を開催していたが、今年度から「地域みらい留学」に参画し、東京、名古屋、大阪、福岡の合計四か所で学校説明会を開催した。また、本校独自に福山でも説明会を実施したが、本校生徒もその説明会に参加し、学校のPRに努めた。県外五か所での説明会の参加人数は、延べ一五〇人を超え、中学三年生だけでなく、中学一・二年生やその保護者も説明会に参加してくださるなど、本校に対する関心の高さがうかがえた。

イ マスコミを通じた情報発信

FM今治の「ラジオバリバリ」で月一回、本校生徒がパーソナリティーとなり分校のPR活動に努めている。また、FM福山のラジオ番組「あなたの出番です!」(パーソナリティー・小林史明氏【総務大臣政務官】)や「おはようときめきタイム」(びんごもぎたて情報)の各番組に本校生徒及び教員が出演した。また、テレビ愛媛、あいテレビ、NHK、毎日放送(大阪)等のテレビ局から取材を受け、オープンキャンパスや生徒募集に係る取組の様子など、多数の特集番組を放映していた。

テレビの影響力はかなり大きく、大阪で放映された毎日放送の番組を見て、後日行われたオープンキャンパスに参加してくださった方も複数名いらっしゃった。さらに、愛媛新聞、毎日新聞を中心に、各新

聞社には様々な機会を捉えて大三島分校についての数多くの記事を掲載していただいた。特に昨年度については、各紙に掲載された回数は延べ四五回を数え、大三島分校の生徒の活躍に対して紙面を見た多くの方からお声かけをいただき大変ありがたく感じている。

本校の看板となる部活動の一つである写真部の活躍もたびたびメディアで取り上げていただいた。特に写真甲子園での活躍については、新聞、テレビ等でも大きく紹介されるとともに、小学館発行の『写真甲子園シャッターガールmoment』というマンガにも、メインキャラクターのモデルとして取り上げられている。



FM 福山でのラジオ収録



毎日放送の収録の様子

4 取組の成果

これまで行ってきた地域活性化活動は、観光客や地域の方々からも好評で、東京や大阪に配架してあるパンフレットを手にした方が実際に大三島に観光に来てくださったたり、参道ガイドを体験した観光客がリピーターとなって再度島を訪れたりするなど確かな成果が認められる。さらに、多くの生徒に地域に対する理解や愛着の深まりが見られるなど、活動に参加した生徒に様々な成長が感じられたことも大きな収穫であった。

伊東建築塾との協働活動では、普通の高校では学ぶことのできない多くのことを生徒が体験することができている。そのような体験がきっかけとなり、近年は建築関係の大学や各種学校を高校卒業後の進路として選択する生徒が複数名いる。また、地域活性化活動がきっかけとなって、観光業と経済活動という点に興味を持ち、深い学びを求めて国立大学の経済学部観光政策学科に進学する生徒もいた。生徒が主体的な活動を行うことで、自己の将来について真剣に考え、具体的な進路目標を設定していく一助になっているように感じている。

参道ボランティアガイドでは、その時その時でガイド対象となる人の反応が異なる。生徒一人一人が情報発信の方法や対応の仕方などをごのように工夫すればよいか考えながらガイドを行うことで、生徒のコミュニケーション能力や情報発信力にも確かな向上が見られたように感じる。

島嶼部高校との意見交換会では、高校生同士の交流が深まるとともに、お互いの地域の違いや良さを知ることができた。地域PRイベント

トでは、同じような地域課題を抱える学校でありながらも、学校ごとのプース内容はバラエティに富んだもので、今後本校が行う大三島のPRにも参考になるものが数多くあった。

「私たちの大三島」「大三島お仕事図鑑」などのパンフレット作成・改訂作業においては、取材や編集作業を通して大三島の新たな魅力を発見した生徒も多かったように感じている。また、印刷・出版できる状態にするには、かなりの労力が必要であることも生徒一人一人が実感できたように思う。さらに、パンフレットを用いたPR活動では、大三島分校の取組を評価してくださる方からの励ましの言葉によって、改めて地域の温かさを感じることができた。

地域おこしイベント「夕涼み会」は新たなイベントで、参道周辺地域の若い方々が発案し、大三島分校生に協力を依頼してきたものである。訪れた人だけでなく、実際に関わった生徒からも、イベントに対する肯定的な感想とともに、次年度以降の実施を望む声が多く聞かれたことが有意義な実践であったことを証明するものであると感じている。生徒たちのイベントの企画・運営能力の伸長に資する部分も大きかったように思う。

学校説明会を中心とする学校のPR活動についても、平成三十一年度の入学志願者が四二名となり四〇数年ぶりに定員を上回るなど大変大きな成果が得られた。生徒が先頭に立って動くことで、多くのマスクミやメディアも興味を持って本校の活動を取り上げてくれたように思う。また、建築家の伊東豊雄さんやF・C今治オーナーの岡田武史さん、サイボウズ社長の青野慶久さんなどの著名な方までもが、本校の活動に対して興味を持ち、協力してくださったことに我々教職員も驚きを覚えた。自分たちがまず行動を起こすことで、人とのつながりができ、

新たなチャンスが生まれるということも、これまでの活動を通して生徒自身が実感できたのではないかと感じている。また、最初は原稿を見ながら不安げに説明をしていた生徒たちが、回数を重ねるごとに説明が上達し自信を持って説明ができるようになるなど、人前で話す経験は確実に生徒たちのコミュニケーション能力の伸長に役立っている。さらに、自分たちの学校の特徴や自分自身の能力について客観的に捉え、相手に説明する経験は、生徒のメタ認知能力の向上にも確実につながっている。

5 今後の展望

以上、大三島分校における地域活性化を核とした学校の魅力化について紹介してきたが、これらの活動を通して、生徒たちに確かな成長が感じられることは何より大きな収穫であり、本校の教育活動の方向性が妥当なものであることの裏付けとなっているように感じている。また、これらの活動を通して、生徒の大三島への愛着が深まるとともに、志願者の増加や地域の活性化についても着実な成果が見て取れることは、嬉しい限りである。

しかし、教育現場において地域活性化活動に取り組む限りにおいては、地域活性化の成果のみを目的化すべきではないということにも私たち教員は留意しなければならない。地域が元気になり、大三島に人が増えることはもちろん喜ばしいことであり、大三島の将来にとっても大切なことであるが、本校で行われる教育活動そのものが、大三島

の活性化のため、生徒数を増やすため、学校を存続させるためだけに行われる、生徒の成長をなおざりにしたものになってはならない。

魅力ある教育活動の実践には、地域資源・地域人材の活用を始めとした地域の協力が必要不可欠である。大三島分校が生徒にとって本当に魅力のある学校となるよう、今後も地域・教職員が一体となって努力を続けていきたい。

本論文は令和元年度中に寄稿されたものです。

積極的傾聴（共感的受容）のインタビュー

——編集後記に代えて

『地域人材育成研究』第二号は、愛媛県立今治北高等学校大三島分校の生徒の声を報告しました。

インタビュー調査はとてむくつろいだ雰囲気で行われました。インタビューアは高校生との年齢差が少ない若手であり、しかし訓練された経験のある研究者であり、私も同席していたのですが、高校生は思っていることや感じていることを自由に語っていました。

社会調査にはいろいろな方法があります。たとえば○×式のアンケート調査に代表されるような、あらかじめ研究者が用意した質問に答えてもらい、研究者の仮説を確かめるといふ方法があります。これに対して、研究者はどんなに先行研究を読み込んでいたとしても、なるべく自分の仮説に囚われずに（自分の仮説が変容していくことを求めるかのように）、回答者の解釈の枠組みや感覚の枠組みを浮き彫りにすることを試みるといふ方法もあります。回答者に寄り添った方法です。後者の方法をとる立場の一つに、社会的構築主義という考え方があります。私たちは社会的構築主義の立場からインタビューを行いました。

社会的構築主義によると、回答者はあらかじめ考えを持っている場合もあるが、インタビューアとのや

りとりの中で、考えていたことに気づいたり考えが明確化したりするといえます。また、自分の考え方や気づき方の枠組み——これを解釈枠組みといいますが、明確化するといえます。

今回のインタビューでは、社会的構築主義の考え方に近いことがおきていました。インタビューアはあらかじめ理論や仮説を勉強していました。あらかじめ大まかな質問項目を用意していました。前述のように私はインタビューに同席していましたが、インタビューアは生徒が高校生活を考えるのを「積極的傾聴（共感的受容）」することを心がけ、生徒が深いところにある意識や普段は気づかずにいた意識と向かい合うことを支援しました。

大三島分校の生徒は写真甲子園に出場していますが（桐木憲一『写真甲子園 シャッターガール moment』小学館、で紹介されています）。生徒はレンズを通して普段見ている大三島とは異なる大三島を見たように、積極的傾聴（共感的受容）というレンズを通して様々な意識と出会いました。生徒の語りには、生徒の深層意識や普段は当たり前だに思ってた深く考えなかったことや解釈枠組みが含まれていました。

本報告書は生徒の意識や気づき、解釈枠組みを記述することを目的としています。研究者の仮説の検証結

果を報告することや、生徒の意識や気づき、解釈枠組みの分析結果を報告することよりも、生徒の様々な意識、気づき、解釈枠組みを記述することを心がけました。ただし、記述は調査者の目に映ったことを調査者の言葉で記述しています。社会的構築主義の観点からこのことを説明すると、A 調査者がインタビューを行い、A 調査者の目に映った生徒を A 調査者の言葉で紹介した、ということになります。読者のみなさんには、A 調査者のあらかじめの仮説や解釈がインタビューの中でどのように変化したかを読み取っていただくのも一つの読み方だと思います。あるいは絵画を見る時と同じよう、描き出された内容をみなさんの目線で解釈していただくのも一つの読み方だと思います。

地域人材育成研究会代表

樋田大二郎

2

地域人材育成研究

第2号

二〇二〇年四月三〇日発行

特集…各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立今治北高等学校

大三島分校生徒インタビュー

デザイン…金子あかね・金子純一

編集・発行…地域人材育成研究会

Print ISSN 2435-3604

Online ISSN 2435-3612

ISBN978-4-910384-02-3 C3037

本誌の全文の電子ファイルは次の地域人材育成研究会ウェブサイトで公開しています。

<https://rhrd.net/>

本誌の著作権の全ては本研究会に帰属します。

ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を複製や再配布することができます。

本誌をみなさんでご活用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、愛媛県立今治北高等学校大
三島分校の許可を得ることを条件といたします。

本誌に使用されている写真は、愛媛県立今治北高等学校大
三島分校から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

著作権ポリシー



高校魅力化プロジェクトとは

その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の3本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクトです。

グローバルとローカルを結ぶグローバル人材の育成、答えが一つに定まらない時代に、決断を答えにする、21世紀スキルを持った人材を育成します。

<http://c-platform.or.jp/>

<https://miriyokuka.com/>

ISBN978-4-910384-02-3

C3037



地域人材育成研究

Regional Human Resource Development Studies

編集・発行：地域人材育成研究会

Edited by The Forum on Regional Human Resource Development

2

地域人材育成研究会ウェブサイト

<https://rhrd.net/>